千枝ちゃんの
校内露出日和

宿題をしようとした千枝ちゃんだが
宿題のプリント類を学校に忘れて
きた事に気づいた。
学校はコロナ禍でしばらく休校。
どうしよう･･･悩んだ千枝ちゃんは
とにかく学校に行ってみることに
した。もしかしたら先生学校に来て
るかもしれない･･･
そんな期待をもちながら･･･

学校についたがやはり門は閉まってる。
とはいえ宿題のプリントは必要だし･････
千枝ちゃんは昔友達が言ってた学校の裏の生け垣に
子供一人が通れるくらいの隙間があって出入りして
るって話を思い出し、裏にまわってみた。
「これかな？」
千枝ちゃんは四つん這いになりその隙間を抜けて
校内に無事に入ることができた。

千枝ちゃんはまず職員室に向かった。
「先生･･･いるかなぁ？」
職員室のとを開けて見回したが誰も
いない。宿直室や用務員室もまわって
みたがやはり誰もいなかった。
誰もいない廊下･･･千枝ちゃんの足音
だけが響き渡った。
教室に着いて無事にプリント類を
回収した後、窓を開けて校庭を見回
した。

「ほんとに私ひとりきりなんだ･･･」

千枝ちゃんは、いつも話し声や笑い声
校庭で遊ぶ生徒の声が響き渡ってる
校内が静寂に包まれる違和感を
自分だけ異空間に飛ばされたような
そんな感覚に陥り、何度も教室の中を
見回した。

千枝ちゃんはリボンをとり
ブラウスのボタンを一つ一つ
はずした。脱いだブラウスを
畳んで机の上に置き、続いて
スカートを脱ぎその上に重ねた。
そしてまるで自分の部屋で服を
脱いでるかのように下着も脱ぎ
すて、一糸まとわぬ姿になった。
全裸になった千枝ちゃんは教室
の中をぐるっと見回し、大きく
息を吐いた。

「私、教室で裸になっちゃった・・・」

急に恥ずかしい気持ちと
心地よい快感が体を
駆け巡った。

「千枝、悪い子だ・・・」

千枝ちゃんは少しうつ
向いた。

最初はイケナイ事をしてると
いう罪悪感とその背徳心を
快感に感じる気持ちがせめぎ
あってた心の中は、次第に
背徳心を楽しみ方向に傾いて
いった。
誰も見ていないとわかってな
がらも何となく胸や股間を隠
すように当ててた手も、その内
胸や股間から離れていった。
裸んぼで授業を受けてるかの
ように席に着席してみたり、
裸んぼで教壇に立ってみたり
・・・誰もいない教室に裸でいる
ことが楽しく感じるようにな
っていた。
お腹が冷えたのか、おしっこに
行きたくなった千枝ちゃんは
ふと何かを思いついたような
顔で掃除道具箱から洗面器を
とりだし、そこにおしっこをし
はじめた。
「千枝・・教室でおしっこしてる」
おしっこをしながら快感で鳥肌
が立つ感覚を覚えた。

おしっこを出し切って我に返った
千枝ちゃんは少し慌てた表情で顔を
赤くした。
「やだ‥ティッシュとか持ってないよ」
千枝ちゃんはおしっこの入った洗面器
を持ち、お股から太腿におしっこを少
し垂らしながら慌てて教室を出た。
千枝ちゃんが思いついたのは校庭の
片隅にある水飲み場だった。
下水におしっこを捨て、洗面器を丁寧
に洗った後、水飲み用水道にまたが
って蛇口をひねった。
股間に冷たい水が勢いよく噴き上が
った。

「ふわぁ〜気持ちいいです･･･」

おしっこのたれてた太腿と股間を念入
にキレイにした。

腰を振りながら股間を洗ってる途中
噴きあがった水が時折膣の中に入り
込んだ。その度に電気が走るような
快感を千枝ちゃんは感じた。
「ここ･･･かな･･･？」
腰を動かしながら一番気持ちいい
ポイントを探った。
「ここだ･･･」
一番気持ちいいポイントを探り当てた
千枝ちゃんは蛇口を更にひねって
水圧を上げた。膣の中に入り込んで
くる水は同時にクリトリスも刺激し
それに全裸で校庭の片隅にいると
いう背徳感がプラスアルファされ
今まで感じたことのない感覚に浸
っていた。

「あ‥ああ･･･っ！」
絶頂を迎えた千枝ちゃんは噴き上がる水から
股間の位置をずらしぐったりとコンクリートの
壁にもたれかかった。
「千枝･･･悪い子だ･･･教室に戻ろ･･･」
水飲み場から離れた千枝ちゃんは赤面しながら
教室に向かった。

教室に戻る途中、
ふと体育館が目に入り
ちょっと寄ってみる
ことにした。
体育館の中には生徒
達が遊びに使ってた
平均台やマットがその
ままの状態で置かれて
いた。
「千枝体育はあまり得意
　じゃないんだよね」
そう呟きながら平均台
にを渡り始めた。
フラフラしながら渡り
時折大きくバランスを
崩し体を左右に大きく
ゆらして立て直そうと
した瞬間、膨らみ始めた
胸の揺れを感じた。
「ちょっとおっぱい・・・
　大きくなったかな」
自分の胸を手のひらで
包みながら首を傾げた。

次にマットで前転をして
みることにした。
「えいっ！」
マットの中心から前転した
千枝ちゃんの体はマットの
右に向かって転がり、マット
の上にドシンとお尻をついた。
「どうして真っ直ぐ前転でき
　ないんだろう・・・・？」
千枝ちゃんはちょっとブス
ッとした表情で天を仰いだ。
しばらく天を仰いだあと、
そのままクスッと表情を崩し
た。
「なんだか・・・楽しい・・・」

裸んぼで色んなことをしても
誰の目にも触れない・・・・
普段、他人の目を気にしなが
　ら生きている千枝ちゃんに
　とってそこは開放感に溢れ
　る心地よい空間となって
　いた。

次に千枝ちゃんは
体育館の壁に立てかけ
られていたフラフープを
始めた。
腰を大きく振って腰の
フラフープを回した。
平均台をしてる時にも
感じたけど、やっぱり
おっぱいちょっと大きく
なってる・・・・・
おっぱいが左右に振られ
てるのを感じた。
フラフープを途中でやめ
左右の乳房に手を当てた。
「おっぱい・・・大きくなる
かな・・・？プロデューサー
さんはやっぱり大きい女
の人がいいのかな」
そんな事を考えながら
左右から抱えあげるよう
におっぱいを揉み始めた。

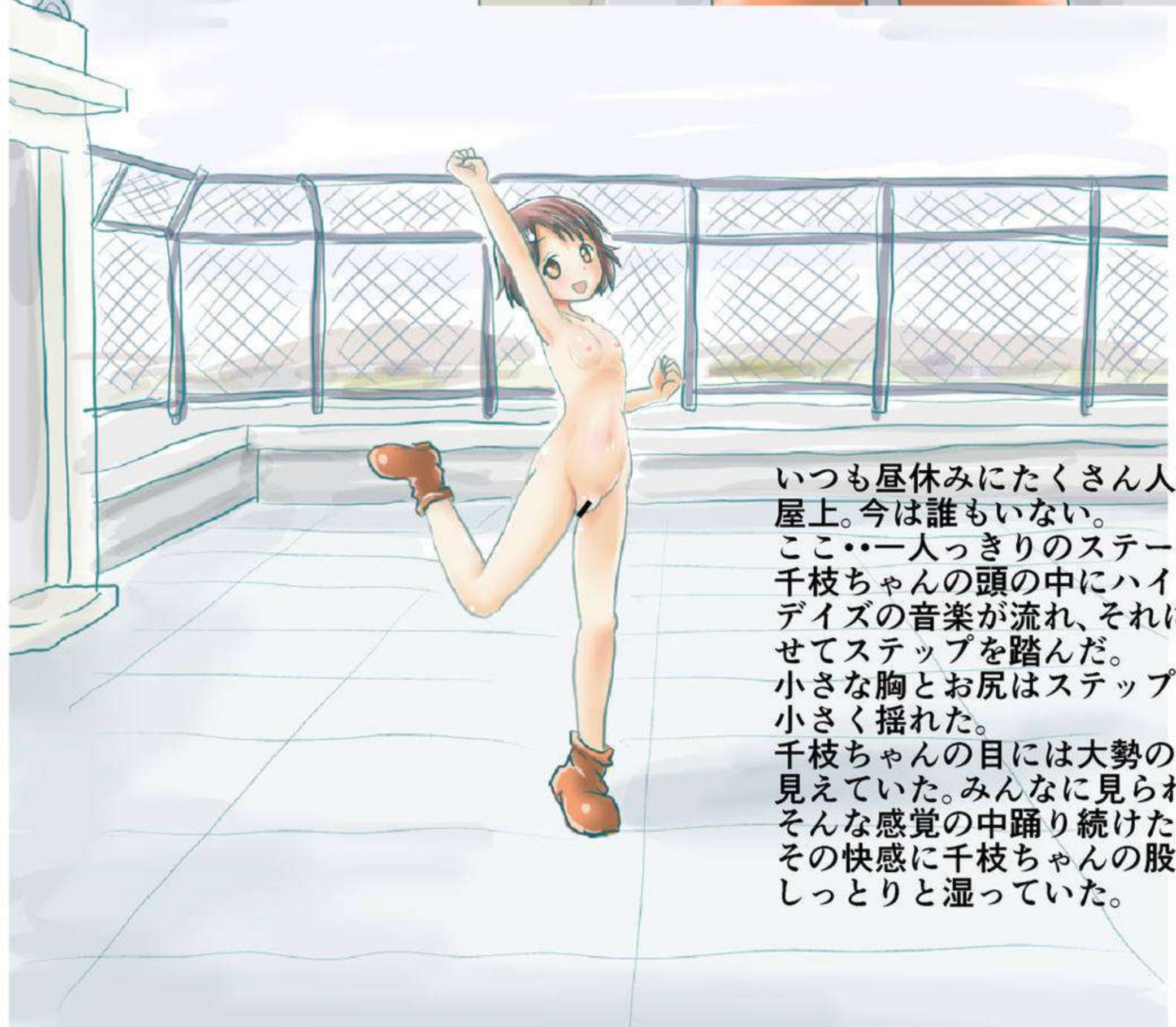
おっぱいを揉むうちに
ムラムラしてきた千枝
ちゃんはフラフープを
手に取り、それを跨いで
フラフープで股間をこ
すり始めた。
既に水飲み場でかるく
イッていた千枝ちゃん
のアソコは適度に濡れ
ており、フラフープは
ローションを塗ったよ
うにクリトリスの上を
なめらかに滑った。
「私体育館でオナニー
してる・・・」
そのシチュエーション
がより一層興奮を増長
させた。
誰も見てない開放感の
中、体育館でみんなに
見られながらオナニー
してる・・・そんな想像が
千枝の中で駆け巡り、
そして千枝ちゃんは
絶頂を迎えた。

フラフープオナニーで絶頂を迎えた後、しばらくその場でぐったりと寝そべってた千枝ちゃんはむっくり起きあがりクスッと軽く笑った。
「はぁ〜喉かわいちゃった‥‥」
軽くスキップを踏むような軽やかなステップで体育館の片隅にあるウォーターサーバーに向かった。
ペダルを踏むと勢いよく水が放物線を描いた。その放物線を遮るように千枝ちゃんは水に口をつけた。
かなりのどが渇いてたのか、冷水は千枝ちゃんの口に次々吸い込まれていった。

体育館を出た千枝ちゃんは屋上に向かう階段に向かった。いつも昼休みにお友達と遊びに行く校舎の屋上。
階段を上がろうとしたが鍵が閉まっていた。とはいえさほど高くないフェンスだった。
千枝ちゃんは大きく足を開き、フェンスの上に足をかけた。大陰唇が左右に引っ張られ軽く秘部が口を開けた事も気にせず千枝ちゃんは勢いよくフェンスを乗り越えていった。

階段を上がってる途中
階段から外を眺めた。
友達と屋上で昼休みを
過ごすときに見る風景と
同じはずなのに今日は
ちょっと違う風景に見
えた。
そんな今を何かに留め
ておきたくなってスマホ
で写真を撮ってみた。
こんなところ、誰かに見
られたら私どうなっち
ゃうのかな‥
そう考えるとお腹の下の
方がきゅんきゅんして
きた。

「あ‥この写真‥撮って
どうするんだろ？私‥」



いつも昼休みにたくさん人がいる
屋上。今は誰もいない。
ここ‥一人っきりのステージだ‥
千枝ちゃんの頭の中にハイファイ
デイズの音楽が流れ、それに合わ
せてステップを踏んだ。
小さな胸とお尻はステップと共に
小さく揺れた。
千枝ちゃんの目には大勢の観客が
見えていた。みんなに見られてる‥
そんな感覚の中踊り続けた。
その快感に千枝ちゃんの股間は
しっとりと湿っていた。

ハイファイデイズの後も
数曲分頭の中で流れる
音楽に合わせて踊りきっ
た。まさに千枝ちゃんの
一人ステージだった。
一息ついた時、空が徐々
に赤らんできてる事に
気がついた。
「わぁ〜・・・この時間の
屋上からの眺めって
すごくキレイ・・・」
フェンスに指をかけ
赤く染まった夕焼け空
に心が奪われた。

どれくらい眺めていた
だろう？千枝ちゃんが
我に返ったきっかけに
なったのは尿意だった。

さっきお水飲み過
ぎたかも・・・・
そうはいうものの
トイレまではかな
り距離がある。
千枝ちゃんはふと
フェンスに向かっ
て大きく脚を開い
た。
そして、大陰唇を
指で大きく押し広
げフェンスの外に
向かって勢いよく
淡黄色い液体の放
物線を描いた。
小さな個室で便器
に向かってするの
とは全然違う開放
感と何とも言えな
い快感がゾクゾク
感となって千枝ち
ゃんの背中をかけ
ぬけた。

そろそろ帰ろう･･･教室に戻る
途中、階段を上がってて数日前
階段の下から男子たちが千枝ち
ゃんのパンツを覗こうとしてた
ことを思い出した。
アイドルになる前だったらそん
な男子に気づいたら恥ずかしく
てスカートを抑えただろうけど
その時の千枝ちゃんはたとえ
パンツを覗こうとしてる男子で
あってももっと自分を見て欲し
い･･そんな気持ちになってる
自分に驚いたのだった。
そして見られることに対する
欲求とゾクゾク感にしっとり
パンツを濡らしながら、
気持ちの高鳴りを抑え
続ける千枝ちゃん
だった。

その時の事を思い出しながら
千枝ちゃんはお尻を大きくつ
きだし、脚を開いた。
あの時、男子たちに向かって
こんなポーズ
とってたら男
子達はどんな
反応したかな
･････？
千枝は千枝の
ことをずっと
見ていてくれ
るならこれ位
いいんだよ？
千枝ちゃんの
目には誰もい
ない階段の下
に多くの男子
が千枝の事を
見てる姿が見
えた。
千枝･･すごく
悪い子です･･

階段を上がったところで
千枝ちゃんは人の気配に
気がついた。
そっと覗いてみると‥
先生！？嘘‥誰もいな
かったんじゃ‥‥
千枝ちゃんは自分し
かいない世界から
急に現実に引きずり
戻された。
服は教室‥今こんな
所を先生に見られたら
私‥もう学校に来れな
い‥そんな恐怖の現実
が千枝ちゃんの頭を
よぎった。
とにかく先生‥早く
行って‥
そんな切羽詰まった
状況なのにあそこの
キュンキュンが止ま
らず、股間の割れ目
に沿って指を何度も
走らせていた。

先生の姿が見えなくなった
のを確認して千枝ちゃんは
ダッシュで教室に入った。
早く服を着なくちゃ‥
パンツをはこうと
した瞬間、再び足音
が近づいてくるの
に気づいた。
しまった！急いで
教室に入ったから
大きな音たてちゃ
った？どこかに隠
れなくちゃ！
足音が近づいてく
る中焦りながら隠
れる場所を探す。
「あ！教壇！」
教壇の下に滑り込
んだ瞬間教室の扉
が開いた。
ぎりぎりのタイミ
ングだった‥‥‥

先生が教室に数歩入ってきて教室を見回した。
着替え、椅子の上に置きっぱなしだ…ばれないかな…
心臓が口から飛び出しそうなくらい大きな鼓動が鳴っている。
先生‥早く行って‥
先生の滞在時間は2分ほどだっただろうけど1時間にも感じた。
こんなに危険な状況なのに千枝‥少し感じてる‥‥
千枝なんだかおかしいです‥‥

先生の足音が遠ざかったのを確認して更にしばらく様子を見た後で教卓の下から這い出した。早く服来て教室出なくちゃ‥足を踏みだそうとした瞬間千枝ちゃんはその場に倒れ込んだ。緊張のあまり腰が抜けたようだ。
「あっ！だ‥だめ‥！！！」
途中で止めようとしたが下半身に力が入らない！
千枝ちゃんはその場でへたり込んだまま教壇に聖水を撒き散らした。

やっと身動きができるようになったのは5分程たった頃だった。
服を着て撒き散らした股間から噴出した液体を掃除するまで先生が戻ってこないか緊張の10分間だった

教室を出て階段を降りようとしたところで先生に呼び止められた。
先生「ちょっと君。学校で何してるんだね？」
千枝「あ‥すいません‥宿題のプリントを忘れて‥‥」
先生「あ、佐々木さんか。」
千枝「勝手に入り込んですいません職員室にもお伺いしたんですが誰もいらっしゃらなくて」
先生「そうかそうか。それはすまなかったね。佐々木さん、お仕事の方も頑張ってるようだね。学業も頑張ってるようだし体に気をつけて頑張りなさい」
千枝「はい、ありがとうございます」
先生「それじゃ気をつけて帰りなさいよ」
千枝「はいっ！」
先生「あ、そうだ。佐々木さん」

千枝「はい？」
先生「さっき校舎裏を歩いてたらパラパラっと雨が降ってましたので傘が必要なら職員室にありますよ？」
千枝「雨？雨ですか？？」
（さっき屋上居た時あんなに天気良かったのになぁ‥‥裏庭？え？もしかして私のおしっこ？（汗））
千枝「えっと‥何分くらい前ですか？」
先生「30分くらい前かなぁ？今は雨もあがってるようだけど」
千枝（うわ〜私のおしっこだ‥きっと）「だ‥大丈夫です‥もう止んだみたいですし‥そ‥それでは失礼します！」
先生「そうか。それじゃ気をつけてね」

END

初めての人もそうでない人もこんにちは。Finalです。去年のカラマス以来の同人誌となります。そして今回もTwitterにアップしたイラストの寄せ集め本となりました。ちゃんと描き下ろす予定もネームもあったのですが、コロナ禍でなかなかエンジンがかからなくなってまして‥‥、次こそはちゃんと本を一冊出したいと思います。それと並行して久しぶりにCG集なんかを出してみたいなぁって思ってます。今回のこの本はtwitterのエロ垢で連載したものなのですが、これをちゃんと清書してちゃんとしたCG集としてpixivBOOTH等でDL販売行う計画もあります。今まで本だのメディアだので頒布するという形式に拘ってきたというかそういう形式でしか同人活動してませんでしたが、そろそろ考え直さなくちゃかなぁ？って思いはじめました。あとFANTIAメインでファンサイト運営しようと去年おもむろに始めたのですが、R18やってると頻繁にあれがだめこれがだめと言われ、それ以来更新も滞ってしまいましたが、そういうのに比較的ゆるいpixivFANBOXで活動再開しようと画策しております。そもそもちゃんとしたCGを長い間描いてなかったのでそろそろエンジンかけていこうと思いますのでよろしくお願いいたします！

https://twitter.com/final_maichan https://twitter.com/final_maichan https://twitter.com/final_maichan https://twitter.com/final_maichan

奥　付

発行　：タケムラ酒店
　　with まいちゃん企画
発行人: Final
発行日: 2020/10/04
E-Mail: naru1971@gmail.com
twitter: final_maichan
pixiv : 97405